

後藤 健 著『メソポタミアとインダスのあいだ —知られざる海洋の古代文明—』

筑摩書房、2015年12月、292頁

宗基 秀明

Book Review: *Between Mesopotamian and Indus Civilizations: Unknown Ancient Maritime Civilizations.*

By Takeshi Gotoh, Chikumashobō, 2015

Hideaki SHUDAI

はじめに

本書は、アラビア湾岸とそこを取り囲む地域を一つの歴史的世界として捉えることを目指す一歩として著述されたものである。

メソポタミアやイラン、アラビア半島、インダス流域の考古学成果を個別に扱った書籍は多数あるが、湾岸世界を視点として北東にイラン高原からインダス、北西にメソポタミアを見渡しながらかつてアジア西部に興った文明形成を見通そうとするものはなかった。それが、邦語で出版されたことは嬉しい限りである。また、著者は鈴木八司、小西正捷につづいてアラビア湾岸に浮かぶ小島バハレーンやカタールでの調査を古代オリエント博物館在任中の1980年代より始め、90年代には小西、近藤英夫と共にバハレーンでの調査を行ない、現在も新たなプロジェクトを継続中である。90年代の調査には評者らも参加させていただいた。著者は石器、墳丘墓、神殿跡などの調査を続けてきた傍ら、チャールズ・D・ベルグレイヴ著『ペルシア湾の真珠—近代バーレーンの人と文化』(2006、雄山閣)をペンネームで訳すなどアラビア湾岸地域考古学の第一人者である。

本書はその題名が示すように、「前三千～前二千年紀のアラビア湾、特にアラビア半島東部沿岸地方における文明の興亡を歴史の中に正しく位置づけること」(p. 9)を第一の目的としている。それはとりもなおさず、湾岸とそれを取り囲む陸地を歴史的に一体性のある地域として位置づけると同時に、この地域がこれまで一つのまとまりある歴史的地域として見なされてこなかったことに異を唱えるために書かれたことを示す。『メソポタミアとインダスのあいだ』と題名を記したのは、そうした理由によるものであるが、終章に述べられているように「湾岸文明」なる用語を独り立ちさせることも目指した書である。そして、「湾岸文明」を考察することで、「常識的」とされてきた「古代文明の成り立ちとは少しばかり異なった文明の起源」

(p. 10)を見出すことができることも語る。その「常識的」文明形成の地であるメソポタミアには資源がほとんどなく、域外との遠隔地間交易によって文明は成立しえたが、交渉相手が全くの「蛮族」では相手にならず、一定の文明度を備えていたイラン高原とアラビア湾方面がその相手として想定されると述べる。これを前提として、遠隔地間交易において物資供給が、いつ、誰によって、何を、どのように交換され、そしてそれらの経時的状況変化によって何がもたらされたかを明らかにすることにより、「湾岸文明」の成立を考察しえるだろうとする。

本書の内容

上記の目的を果すための構成は、「はじめに」に続いて第一章メソポタミア文明の最初の隣人たち、第二章イラン高原の「ラピスラズリの道」—前三千年紀の交易ネットワーク、第三章ウンム・ン＝ナール文明—湾岸文明の成立、第四章パールパール文明—湾岸文明の移転、第五章湾岸文明の衰退、そして「おわりに」で締めくくられる。これらの各章でイラン高原での文化的動静が大きく湾岸地域と結びついていたことを提示しているのも本書の大きな特徴であり、「湾岸文明」をひも解く鍵とされる。

第一章では、メソポタミアに隣接したエラムと湾岸地域にウルク文化拡張期後のジェムデット・ナスル期から初期王朝期の前4千年紀から前3千年紀初頭にかけての文化展開をたどる。イラン高原ではスーサを中心とする都市群のネットワークが成立し、「原エラム文明」が原エラム語を母語とする住民によって創出される。ただし、こうしたイラン高原での都市の興隆は、ファールス地方のタル＝イ・マルヤーン (Tal-i Malyan) 遺跡の層序に見られる定着農耕民の遊牧化と農耕に携わらない人々による都市化という農耕社会の脆弱性に特徴があり、こうして生まれた諸都市のネットワークはスーサという上位都市の指令の下、農耕を基盤とするメソポタミア文明が必要とする物資を供給す

るために緩やかに統合された国家であるとする。

他方、湾岸地域では南メソポタミアのウバイド式土器が残された時期の後、ウルク文化との接触は希薄となる。前3000年前後のハフィート (Hafit) 期にジェムデット・ナスル式土器やイラン東南部テペ・ヤヒヤ (Tepe Yahya) 遺跡などに見られる赤色地黒色彩文土器 (Black on Red) が現れる。この時期の古拙ウルク文字文書に、見知らぬ良き地を指す語として「ディルムン (DILMUN)」の語が見られるようになる。この良き地が銅をもたらすハフィート期の湾岸地域を漠然と指していると解釈する。さらに赤色地黒色彩文土器が出土するオマーン半島が原エラムの都市テペ・ヤヒヤの文化領域に取り込まれたことを示しているとする。

本書ではヤヒヤ「国家」による「植民」にはかならないと記述され、以後も「国家」の語が十分な説明や規定もなく用いられる。とくに「本来ヤヒヤの支配者が海を隔てたオマーン半島に埋蔵される地下資源の事情を偶然に知る可能性はない。専門家を派遣して調査を繰り返させた結果に違いない。そうであれば、原エラムの文明は、別の遠隔地にもさまざまな専門家を派遣して、資源調査を行っていた可能性がある」(p. 59) という文章は、十分に注意する必要がある。原エラム文化域外の諸文化が全く存在しないか、または文化的接触を行っていなかったことを前提としているからである。それは考えにくい。いずれにしても、陸上交易路のみのウルク文化拡張期の後、ジェムデット・ナスル併行期にイラン東南部の文化勢力によって取り込まれた湾岸地域の海上交易を加えた文化交渉圏が成立したことを説いている。

第二章ではスーサの退潮後、イラン東南部のケルマーン地方に現れたシャハダード (Shahdad) 遺跡を中心とした新たな交易ネットワークについて詳述される。そのネットワークはアフガニスタンのバダクシャーンから遠くメソポタミアそしてエジプトにまでイラン高原を運ばれたラピスラズリの交易ルートと重なる。出土資料からシャハダード遺跡をシュメール初期王朝期の史料『エンメルカルとアラッタの主』で語られるアラッタに比定して論が進められる。史料に語られるアラッタに王の存在を認め、ここでもアラッタ国とする。このシャハダードを中心としたネットワークでは、ケルマーン南部のテペ・ヤヒヤ遺跡で製作された古式クロライト (緑泥石) 製容器も交換され、その出土傾向はイラン高原における諸都市による「トランス・エラム文明」の存在を示唆しているとする。なお、第二章中で古式クロライト製容器が、モエンジョ・ダロー (Mohenjo-daro) がまさに都市として現れたその当初にもたらされたとして、トランス・エラムがインダス平原を穀物交易対象地とするため、文明の興起に一役買ったとする意見を

述べる。こうしたインダス文明の興隆に関する言及についての評者の見解は後述する。

第三章以降が「湾岸文明」を語る本書の中核部分である。筆者は「湾岸文明」を非農耕文明と捉え、それを担う人々を海上交易に携わる「海洋民」と位置づける。その興りと本質は、トランス・エラムの交易ネットワークの拡大によって、ハフィート期以来続くイラン東南部との係わりが一層強化された結果であるとする。アラブ首長国連邦アブー・ダビエーのウム・ン＝ナール (Umm an-Nar) 島での調査成果の中でも集落や内部を複数に区切った円筒形積石塚墳墓出土の赤色地黒色彩文土器を中心とする土器、それにクロライト製容器の分類・検討とメソポタミア、イラン南東部、インダス流域出土資料との比較から、この時期の湾岸に次のような性格の文明が生じたとする。すなわち、「ウム・ン＝ナール文明はオマーン半島の銅を採掘し、初期の加工を行なった後に、製品を遠隔地へと送り出すという目的でオマーン半島に作られた文明である。(中略) そしてインダス文明成立後には、メソポタミア、トランス・エラム、インダスという三つの文明、少なくとも三つの世界のハブと化した」(p. 139) と述べる。そのウム・ン＝ナール文明、これを著者はマガン国というが、バハレーン島に植民活動を行なったことを円筒形積石塚墳墓と赤色地黒色彩文土器の存在から指摘し、海洋民の文明は農耕文明とは異なり、容易にその拠点 (著者は首都機能という) を移転させることが可能であったと指摘する。

第四章では前3千年紀末以降に交易拠点となったバハレーン島を中心としてその周辺に栄えたバールバール (Barbar) 文明をとりあげる。著者の論点は、この文明がウム・ン＝ナール文明での交易拠点がバハレーン島に移動して興された文明であり、さらに北方、クウェイト沖のファイラカ島にメソポタミアとの交易出先機関を設置してメソポタミアとの結びつきをより一層高め、メソポタミアにとっての湾岸地域に対するディルムン観が定着した時期でもあるとする。その裏付けとして、バハレーン島のバハレーン砦 (Qal'at al-Bahrain) 遺跡の編年とその推移を出土土器変遷から探り、在地のバールバール文化にウム・ン＝ナール文化が移入された様子を示す。さらに遠くファイラカ島での出土土器変遷と発見された宮殿や神殿と思われる公共建造物、それに墳墓が営まれない状況を指摘する。

この新たな文明は単なるウム・ン＝ナール文明の移動ではない諸相が特徴である。その一つが、バハレーン島に発見されたバールバール神殿やアイン・ウム・スジュール (Ain Umm es-Sujur) 遺跡の井戸状遺構に確認できる暗闇から湧き出る水の神性に由来する水神を祀る神殿遺構である。規模は小さく、また水との係わりが薄れた祠はバハレーン島のサール (Saar) 遺跡とファイラカ島

でも発見されている。二つ目は、前代のウンム・ン＝ナールの円筒形積石塚墳墓の系譜に繋がる単室単葬の円筒形墳墓である。王墓と思しき大型墳墓には副葬品を納める複数の小部屋や生前に造営されたために石室への羨道が設けられていた。副葬品には赤色のバルバル式土器の他、晩式のクロライト製容器をはじめインダス流域やアフガニスタンからもたらされた石製装身具などが活発な対外交渉活動の存在を示している。この交易活動を端的に示す新たな型式の印章が三つ目の特徴である。

アラビア湾式とディルムン式の新旧2型式に分けられる印章は、円形の印面の背につまみがつけられたクロライト製のスタンプ式で、印面にはインダス文明やエラム、メソポタミアに由来する意匠が見られるという。メソポタミア南部、イランのケルマーンヤスーサ、それにインダス文明諸都市からも出土するこの印章や副葬品から窺える対外交渉活動によって、バハレーン島を拠点とするバルバル文明はメソポタミアの人々にとって南の海の向こうにある地、ディルムンと認識されたという。著者は、古拙ウルク文字文書に初めて現れ、以後のメソポタミアの神話や碑文に現れるディルムンを湾岸のバハレーン島付近とするが、ハフィート期のバハレーン島を含む湾岸地域を漠然と指す原ディルムンの時期とアッカド期以降のバハレーン島およびその出先機関であったファイラカ島を指す初期ディルムンの時期とで異なっていたであろうとする。他方、メソポタミアの人々にとってより身近なファイラカ島の神殿が後世のカッシート期にまで存続したことを前提に、メソポタミアの人々はバルバル文明の神観念を裁可（文化的サンクション）し、エンキと同一視することでメソポタミアにとってのディルムン観が定着したと想定する。よって文書中のディルムンに関する記述が時期によってまちまちであった。いずれにしてもメソポタミアが身近にディルムンを認識したバルバル文明期を初期ディルムン時代とする。

第五章ではその名の通り「湾岸文明」、バルバル文明の衰退を扱う。海洋民の文明であるバルバル文明は、シリアからインダス流域に至る湾岸を囲む広域の政治的・経済的変動の中で理解すべきであり、インダス文明の衰退に加えてメソポタミア南部の衰退が両地域間の交易を退潮させ、海洋民文明の衰退をもたらしたとする。当時のメソポタミア南部は、「海国」の台頭が古バビロニアとの衝突を生じさせて衰退した。本章ではバルバル文明末期のバハレーン島とファイラカ島の様子をその層序・編年作業の他に、文献史学の成果を駆使してメソポタミアの社会状況をあぶり出すことで描こうとする。

バルバル文明末期のファイラカ島3A期にバルバル式土器の他にメソポタミア系土器が増加する。その

要因をメソポタミア南部の「海国」の人々の来住と捉え、続く前1600年前後のファイラカ島3B期にはほぼメソポタミア系土器に代わる。バハレーン島でもバハレーン第Ⅲ期初頭の一時期にバルバル式土器との共存が見られるが、すぐさまメソポタミア系土器によって占められてしまう。メソポタミア系土器の凌駕という考古学的証跡によって指し示されるバルバル文明の衰退は、ファイラカ島で次第にメソポタミア系土器の増加が見られる一方で、バハレーン島内の文明中枢組織はいち早く消失するものであった。しかし、バハレーン島内では同時期の土壙墓が数多く残される状況も指摘される。

著者は、メソポタミアにより近いファイラカ島にバルバル文明の繁栄が残照のごとく最後の輝きを見せたが、ファイラカで活動した人々はその死期をバハレーン島で迎えたと解釈する。前章でファイラカがバハレーン島の出先機関であったとした理解を前提としている。

これより以降は中期ディルムン時代とされ、バハレーン島ではカッシート式土器が出土し、刻文資料も散見されるカッシート時代へと続き、著者の記述はタイロス＝ヘレニズム時代にまで及び締めくくられる。

以上に、本書の概要とその視点を垣間見てきたが、著述中にしばしば見られた「植民」、「植民地」、「居留地」、「出先機関」などについては第五章の最後に若干の説明が記されている。「植民」または「植民地は歴史学上広い意味で用いられている」(p. 261)が、「世代を重ねる住民の定住化」(p. 262)を前提として、当然当該地に埋葬されるとする。バルバル文明のファイラカ島への進出、「海国」の湾岸への進出は墓が築かれないため居留地であるとする一方で、カッシートの湾岸への進出は一定の限定をしたうえで「植民地化」であったとする。選書という性格上、こうした語義の問題に紙数を費やせないことも理解できるが、用語以外にも社会の単位や文化、人々の移動に関する言葉が現代の企業活動用語に置き換えて説明される文章が度々見られ、戸惑う箇所もあった。同様に、土器型式や遺物の移動を安易に人の移動、集団の移動と結びつけている点も気になったところである。これに関連して、評者の専門領域であるインダス文明の記述について若干述べておきたい。

まず、第二章で示されたモエンジョ・ダロー遺跡からの古式クロライト製容器の出土年代を遺跡の草創期とする確証はない。モエンジョ・ダロー遺跡からは2点のクロライト製容器が出土している。その内の一点が表面に浮き彫りの縄目文が施された古式の円筒形鉢の破片である。破片は市街地のDK地区表土上面から9mほど下方の建物跡から発見された。この出土層位は、おそらくモエンジョ・ダロー遺跡の下層と思われるが、モエンジョ・ダロー遺跡で

は地山に達した調査がないために判然としない。その他の出土遺物やイラン高原での古式クロライト製容器の出土年代から、おそらくは前3千年紀中頃と想定されている。それを根拠として、交易でもたらされたのではなく、トランス・エラム人がインダスに持ち込んだと解釈される。加えて、バローチスターン(本文中ではバルーチスターンとしているが、少なくともパキスタン領内においてはバローチスターンが正しい)のハラッパー文化の人々をトランス・エラムの交易ネットワークに組み込むことで、トランス・エラム人が平原におりていったとする。しかし、バローチスターンのハラッパー文化遺跡はインダス文明形成後に当該地に進出したのであり、時間的整合性がない。また、ラピスラズリ交易網にバローチスターンが組み込まれたのは文明形成期以前からであり、インダス文明期には前代に比べてラピスラズリの搬入量は激減し、文明期に交易ネットワークの転換があったと考えられる。そのため、西方勢力によるネットワークの拡大や改変ではなく、インダス文明側の域内ネットワークの再構築があったとするほうが理解しやすい。

メソポタミアの交易相手が一定の文明度を備えていたとする解釈は、交易相手の文化領域における拠点集落、または地域が存在していたことを著者自らが指摘している。メソポタミアが必要とした物資は木材、石材、鉱石、鉱物、貴石類であり、拠点集落でそれらが採掘・獲得できたわけではなかろう。拠点集落はさらにその背後にある集落との交易や収奪によって入手していたはずである。

著者はかつて「遺物の中の異物」と題する論文でインダス文明が西方との密接な結びつきを持ち、イランやメソポタミアに現れていた都市の存在を下敷きにして文明社会が生み出されたものとの視点を示していた(後藤 1999)。今回の著書ではイラン、とくにトランス・エラムの強い意志が強調されている。それは、かつてインダス流域に文明以前の諸文化の存在が知られていなかった当時、M. ウィーラーがインダス文明の突然の出現を「文明と言うアイデアがティグリス=ユーフラテス流域からインダスに到来して、ハラッパー文化の進むべき方向を与えた」(Wheeler 1968: 135)との言葉で理解しようとした解釈と重なる。しかし、メソポタミアの遠隔地間交易相手先においても拠

点集落とその背後に存在する村落社会との関係が安定的でなければ、メソポタミア社会を支える交易を構造的に維持できない。そうであれば、インダス流域においても文明社会成立以前に地域社会で安定的に物資の移動を可能とするシステムが存在したと考えなければ、矛盾する。すなわち、文明形成以前に存在した交易形態をインダス文明形成期に文明域内に取り込んで再編成した域内交易への形態転換がインダス文明を生んだと考えられる。著者は、メソポタミアに都市が現れたのにはメソポタミア南部に産出しない物資を求めた交易活動がその背景にあったとしているのだが、インダス流域での文明が拠点集落と村落社会との安定的関係と対外的交易活動から内発的に形成されたであろうことを否定する論理を示さないままに、トランス・エラムの強い影響下でインダス文明が興されたと言及点はどうしても気になってしまうのである。

おわりに

違和感が残される用語の使用もあるが、敢えてそうした言葉を用いた著者の意図は、明白である。それは、本書で取り上げた海洋の文明が常識的な文明形成とは異なる原エラム文明以降の東西を結ぶ交易ネットワークにより成り立っていたもので、その交易拠点が固定されることなく、情勢に応じて移動することを説明するためである。

評者の勝手な理解から文を綴ってきた。浅学のために大きな間違いがあれば評者の責であるが、次のことは確かである。インダス流域からシリアに至る広大な地域を見渡して、西アジアから南アジア世界の古代文明の盛衰を両地域の間位置する湾岸という視点から見渡し、また「湾岸文明」を設定した本書は、非常に貴重な著述である。さらに、本書中に挿入されている編年表や地域間の関係を示した複数の地図は、西アジア、南アジア文明の研究に寄与するところ大であることを確信する。

参考文献

- 後藤 健 1999「遺物の中の異物—インダス文明の遺物から—」『考古学雑誌』84巻4号 422-440頁。
Wheeler, M. 1968 *The Indus Civilization* (3rd edition). Cambridge, Cambridge University Press.

宗臺 秀明

鶴見大学文学部文化財学科

Hideaki SHUDAI

Department of Cultural Property,

Tsurumi University